
COSMIC STAR ~ SECOND WORLD

コーヒー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COSMIC STAR ｝SECOND WORLD

【Nコード】

N4559C

【作者名】

コーヒー

【あらすじ】

バージルーズ事件から2年。テトランスに小型船が墜落した。そこに乗っていた少女は、謎の組織、宇宙海賊、魔族に狙われていた。彼らが求めるものは『楽園』。そんな場所は本当に存在するのか。そして人間と魔族が求める『楽園』とは一体何なのか。レイドとシリアがその『楽園』の真実に踏み込む。COSMIC-STARの第二幕。

プロローグ（前書き）

COSMIC STARの続編です。全く違う話なので大丈夫だと思いますが、前作のキャラが登場します。少しでも詳しく読みたい方はチラッとでもいいので前作を読んで頂ければより楽しめると思います。

プロローグ

バージルーズとの戦いから2年。二人の英雄が救った6つの惑星は日々、平和な日常を送っていた。

バージルーズの研究所は全て崩壊し、そこで働かされていた人達も日に当たる場所へと戻っていった。ヴァイラの街も人々の協力を経て僅か半年で復興する事が出来た。そして今では一番の観光名所にまでなっている。

バージルーズの爪痕は今や一つも残っていない。しかし、人々の心の片隅には多くの人が犠牲になった事実は消え去る事は無かった。それを忘れることが出来ないまま生きていくしかなかったのだ。

失ったものは多かった。だが、得るものが無かった訳ではない。この2年間でジェルラードを含め、五大惑星は変わっていった。その一番の証は技術レベルだった。宇宙船の無限エネルギーの開発に成功し、様々な可能性を見出すことが出来るようになった。

そして、ジェルラード部隊、警備部隊もバージルーズ事件から変わっていくことが出来たのだ。

エルリール

とある森の中。

「ふう……。モンスターがこんなに集まる事なんて今までなかったんだけどな」

一人の男がそう呟いて額の汗を拭った。その男に、武器を持った男が近寄ってくる。

「ステイブ隊長。東側のモンスター、全て退治しました」

「そうか」

この森にモンスターが異常発生した、との連絡を受け、ステイブ率いる第五部隊とテトランスの警備部隊はその鎮圧の為、この森を訪れていた。

朝日が照りつける中、一人も怪我人を出すことなく着々と作業は進んでいった。以前ならばこの程度のモンスターにさえ苦戦していた警備部隊も、今や余裕で倒せる程に成長していた。

ステイブは警備部隊に任せ、西側も何事も無く終わった、という報告を聞き、笑みを浮かべ再び汗を拭った。

「よし！これで任務終了だ。皆を集めてくれ」

「了解」

一人の男が通信を始めた。

「それにしても、警備部隊、勿論我々も…強くなりましたね」

「そうだな…。2年前、俺達は何も出来なかった。…もう、そんな事はないようにしないと」

そう言っただけでステイブは空を見上げた。

「何してるのかな…？あの二人は…」

エルリール

「ミラベル！もう少し力を込めろ！そんなんじゃないや良い武器は作れねえぞー！！」

「は、はい！！」

ここエルリールも大きく変わっていた。極寒の惑星ということでも足を運ぶ人も少なかったエルリールは、今ではかなりの数の武器屋が並び、警備部隊、ジェルラード部隊でさえここで調達するようになっていた。

荒れ果てたスラム街も無くなり、ゴロツキ共もそれぞれ職に就いた。その進展に欠かせなかった人物が、全ての武器屋を仕切るグリーンであった。

「グリーンさん！グザリスから剣四本、槍八本の発注が来ました！」

「何！？急いで仕上げる！それからミスリルを発掘部隊に発注しろ。残りが少ない！」

「了解！」

「グリーンさん！エルリールの武器屋が銃の在庫が無くなったらしい

です！」

「直ぐに10個送つとけ！」

「はい!!!」

グリンのいる武器製造工場は行ったり来たりの人で溢れかえっていた。その毎日が慌ただしい生活にも、グリンにとって苦にはならなかった。

「忙しいですね。グリンさん」

グリンの側にやって来た一人の男が、慌ただしく動いていたグリンに声をかけた。グリンは苛立つように振り返るが、その男を見ると笑顔に変わった。

「よう、テイラス。そろそろ来る頃だと思ったぜ！」

「すみません。こんな忙しい時に……」

テイラスはすまなそうに頭を下げた。

「いいってことよ！そんな改まるな。ほら、頼まれてた武器だ」

「有り難うございます」

「それより、いいのか？王女をほったらかしにして。わざわざ来なくても、送ってやったのに」

テイラスは笑みを浮かべた。

「大丈夫です。いつも暇そうにしていますから」

グリンには自然とその光景が頭に浮かび、大声で笑い出した。

オアランド

「あゝ、暇ねえ」

「ジェシカ様！暇ならこの書類に目を通して下さい!!!」

王室で暇そうに足を伸ばすジェシカの前に、大量の書類が置かれた。それをどうでもいいかのように視線を切り、書類を置いた女性に顔を向けた。

「もう、堅いわねえシーラは。」

「あなたが軽すぎるだけです！」

シーラはそう言った後、心からため息を出した。

「ところで、テイラスは何処へ行ったの？」

シーラは呆れ顔に変わった。

「聞いてなかったんですか！？テイラスさんはエルリールへ武器を受け取りに行きましたよ。」

「そういえば……そんな事言っていたような」

「ジェシカ様からも何か言ってお下さい！大変なんですよ！毎日訓練、訓練で。」

真剣な顔を向けるシーラとは対照的に穏やかな表情を見せるジェシカ。

「それはしょうがないわよ。あれほどの人物と出会ったんだもの。影響を受けない方が難しいわよ」

ジェシカは席を立ち、窓際へ移動した。そこからはオアランドの街並みが一望出来た。ジェシカが考え事をする時はいつもこの場所だった。

「まあ、それはそうですけど……」

シーラもジェシカの隣へと移動した。シーラには今ジェシカが誰を思い浮かべているのか想像出来た。

「通信、入れちゃおうかな」

「……駄目です」

ヴァイラ

第二部隊長、アレンは任務帰りに仲間と共に新しくなったヴァイラの街を訪れていた。テトランスと引けを取らないその街にはかなりの人で溢れ返っていた。高層ビルも並び、緑も多い。とても、一度壊滅したとは思えない街並みだった。

その街をぶらぶら歩いていたアレンは、ある店の前で話している親子が視界に入り立ち止まった。

「ねえ、おとうさん。この二人、誰？」

まだ七歳ぐらいの男の子が父親に尋ねていた。その少年の前にあるモニターには、2年前の二人の男女の映像が映っていた。

「この人達はな、五大惑星を救った英雄だ。今のヴァイラが在るのもこの二人のお陰だ。」

「じゃあ、すごい人なんだね！」

「そうだよ。お前もこんなふうになるんだぞ！」

「うん！！」

その光景を見ていたアレンは自然と笑みがこぼれた。決して自分が何をしたわけでもない。でも、自分の事のように嬉しい気持ちになった。

そして空を眺め、

「お前達のことば、あんな小さな少年にも伝わってるぞ」
そう呟いた。

グザリス

「フアーニ！ご飯よ」

部屋の外から母親の声が飛んできた。一枚の写真を眺めていたフアーニは元氣よく返事をする、写真を持ったまま部屋を出て行った。食卓についた後もその写真を眺める。

「フフ。また見てるのね」

料理を手に持ち机に並べる母親は、笑顔で声をかけた。

「うん！また遊びに来てくれるのかなあ？」

「来てくれるわよ、きつと。ほら、食べましょ」

フアーニは写真を机の上に置き、箸を持った。

その写真に写っていたのは、中央にフアーニ、その両サイドにフアーニの手を掴み笑っている二人の男女だった。

五大惑星ではこの二年間、二人の英雄に影響を受けながら、穏やかな時を刻んでいった。

その頃、宇宙では小型船がテトランスに向け急落下していた事に誰も気付いていなかった。

始まりの合図

「それでは、これにて解散します」

テトランスの森では、モンスター退治を終えた第二部隊と警備部隊が森を抜けようとしていた。

全員が強くなった実感があるのか、傷一つ無く笑顔で街へ戻ろうとしていた。その中の会話は、帰って一杯飲むか！などと、頭の中は戦いから抜け出していた。しかし、それは意外な出来事で引き戻されてしまう。

突然、テトランスの森の中を激しい爆音のような音と揺れが包み込んだ。部隊員全員はとっさの事に驚き、頭を抱えその場に縮こまった。

その音が鳴り止み、暫くの静寂が訪れた後、部隊員からは徐々に慌ただしい声が聞こえてきた。この出来事は普通じゃない。誰もがそう思っていただろう。

「全員静かに！一応行ってみるぞ！冷静になって、周囲にも警戒するんだ！」

ステイブがその場を冷静にさせた後、森の奥へと足を進めた。そして、森の奥でその音の原因を見たステイブは啞然とした。

100メートル近くにわたって森の木が無惨に倒れ、その跡がずつと続き、ステイブの目の前には白い煙を上げる一人乗りの小型船が大きな木に当たり止まっていた。その小型船はこれだけの衝撃を受けながらも原型は保っていた。

「第二部隊は小型船の調査。警備部隊はこの辺りの調査をしてくれ」ステイブの命令で驚いていた部隊員は直ぐに行動に移った。そしてステイブは通信機を取り出した。

「四聖官！応答願います！」 その数十秒後、グラゼンが対応してきた。

「ステイブか。どうした？」

「グラゼン聖官。テトランスの森に小型船が墜落しました。」

「小型船？そんなものが宇宙に出たという報告は入っていないが…」
グラゼンは不思議そうに声を出した。ステイブはゆっくりと小型船に近づき手を触れた。

少し温かいのは墜落したことが原因だとしても、この素材は何だ！？

「いえ、恐らくこの五大惑星、又はジェルラードで造られたものではありません。映像も送ります」

その映像を見たのか、ジーマが声を出した。

「未確認惑星から来たもののお？技術レベルはどの位じゃ？」

「そうですね…。使われている素材は見たことのない物ですが、ジェルラードと同じ程度はあると思われます」

そう言つてステイブが小型船を一回りした時、突然音を出し、ハッチが開いた。

「全員下がれ！！」

小型船を調べていた人達は作業を中止し、武器を構え距離を取った。

「ゴホッ、ゴホッ」

「お、女の子…？」

そこから出てきたのは、まだ16歳程度のあどけない少女だった。髪は長い桃色、服装もこの辺りでは見かけない。

その少女は煙の中から這いつくばるように出て来ると、乱れた髪を整え、辺りを見回した。そこで武器を構えているステイブ達に気付くと、ビクツと体を震わせ後ずさった。

その子の瞳も、髪と同じ桃色だった。間違いなく五大惑星の人間ではない。部隊員は武器を構え、じわりじわりと少女に近付く。少女は桃色の瞳に涙を浮かべた。

「皆、武器を下げる。怖がってる」

ステイブはそう命令すると、少し距離を空けた場所ではがみ込み、笑顔を向けた。

「大丈夫だよ。何もしないから。君、名前は？」
少女は喋らない。

「どこから来たの？」

口を開かない。ステイブは少し困った表情を浮かべた。
「立てる？」

その質問でやっと少女は頷き、すつと立ち上がった。

「聖官、取りあえずジェルラードに連れて行きます」

「……ああ。頼む」

「ここ……どこ？」

その時、少女がやっと喋った。幼い声だったがしっかりと聞き取ることが出来た。ステイブは少しほっとした。

「ここはテトランス、という惑星だよ。こっちの事も、君の事も詳しく話したいから、ジェルラード、という惑星に移動したいんだけど……一緒に来てくれるかな？」

怖がらせないように優しく話すステイブ。少女はそれにコクツ、と頷いた。

「よし！じゃあ行こう」

ステイブは数人に調査を任せ、少女と一緒に森を出て行った。

ジェルラードへ戻ったステイブは少女を連れ、四聖官の元へ向かった。

「聖官、連れて来ました」

「ご苦労じゃったな」

その部屋にいたのはジーマとグラゼンの二人だけだった。聖官と言えども、ずっとジェルラードにいる訳ではないが、女性がいたほうが少女にとっても話しやすいだろう、と思っていたのだ。

「今日はお二人だけですか？」

「そうなんだ。ハーリーとダミアはヴァイラの方へ旅行に行ってるな」

グラゼンが苦笑いで答え、それを聞いたステイブは肩を落としました。

「それで？戦艦の中では何か話したのか？」

「この五大惑星とジェルラードのことを話しておきました。」

「そうか。取りあえず、座ってくれ」

俯いている少女を椅子に座らせると、ステイブはその隣に座った。ジーマとグラゼンはその正面に座ると、ジーマが一つ咳払いをした。

「それで、君の名前はなんて言うんじゃ？」

「あ、はい。シャルスールと言います」

シャルスールは少し緊張気味に言葉を出した。

「それじゃあ、どこから来たんだ？」

その質問で少し俯き、ゆっくりと口を開いた。

「私はスラナラージという惑星からエマスグラスと言われる惑星へ移動している最中だったんですけど、途中でルーランデに襲われたんです。私は他の乗客と同じように脱出用小型船に乗ったんですけど、操作が解らなくて……。一週間さまよった挙げ句、惑星の引力圏に入っちゃって……」

「それがテトランスだったのか……」

ステイブが納得したように呟いた。

「そのルーランデ、というのは何じゃ？」

「ルーランデというのは私達の場所では名高い宇宙海賊です」

「その宇宙海賊が何故戦艦を襲うんだ？元々そんな過激な連中なのか？」

ジェルラード付近では宇宙海賊というものを聞いたことが無い。

その為、詳しく聞こうと思っていたが、シャルスールも分からないと言った。

「でも、私は謎の組織にも狙われているんです。その為、エマスグラスの部隊が協力してくれる、と言ってきたのでその惑星に向かうところだったんです。でも、その組織に私がここにいることもいつ

かはバレてしまいます。そうなれば皆さんにも迷惑がかかります。その前に私はこの星を離れようと思うんです！お願いします。小型船を一機貸して貰えないでしょうか！？」

シャルスールは徐々に熱が入り、涙ながらにそう訴えた。

とても信じがたい話だが、今のシャルスールに嘘は微塵も感じなかった。何故狙われているのか？それを聞いたところで自分達には実際何も出来ない。そう思ったジーマは一つの選択をした。

「貸してあげてもいいんじゃないが、話を聞く限り君に操縦は出来んだろう。出来たとしても、その組織に撃ち落とされるのは目に見えている」

「それは、そうですけど……」

確かにジーマの言う通りだった。シャルスールは悲しそうに目を伏せた。

「と、言う事はじゃ。我々の方から送るしか方法は無い」

その言葉でシャルスールは顔を上げジーマを見た。ジーマはステイブの方へ目を移した。

「ステイブ、すまんがオペレーター室へ行つて宇宙船、レイリアと連絡を取るように言つて来てくれんか」

その言葉でステイブは勢い良く立ち上がった。

「聖官！それじゃあ……」

「うむ。それしかないじゃろう」

「分かりました！今すぐそう言つて来ます！」

ステイブは笑顔で駆け出して行った。シャルスールにはその笑顔が何なのかわからなかった。

「心使いは有り難いですけど、皆さんに危険が……」

「確かに危険じゃが、彼等なら引き受けてくれる筈じゃ」

「何故狙われているか、などはその時に話してくれればいい。今はゆっくりしとくんだ」

「……はい」

シャルスールは、嬉しい気持ちと、申し訳ない気持ちの両方でそ

う小さく返事をした。そして、首に掛けていたペンダントをギョッと握り締めた。

頼み事

「進路状況、異常ありません」

「障害もありません。順調です」

とある宇宙区画を進む少し小型の戦艦。階段を降りれば多数の部屋。そして今声を出した二人の女性がいるコントロールルームという構造だ。

そのコントロールルームの前方はガラス張り。その前に座りモニターを操作しているのが先程の二人の女性。その少し後ろの段差の上で宇宙を眺めている一人の女性。またその後ろには団欒場所、と言うべきだろうか、ソファアが並んでいる。

「それにしても、暇ねえ」

モニターを操作しているイリーナが退屈しているように声を出した。それにつられるように隣にいたマラノアも口を開く。

「そうね。最近ずっと飛びっぱなしだもの。シリア、一回五大惑星に戻る、っていうのはどう？」

マラノアは振り返り、宇宙を眺めていたシリアを見た。シリアも少し考える仕草をする。

「そうね。冷却装置の調子も悪いみたいだし、それもいいかもね」「やった〜！美味しい物食べまくるぞお〜！！」

イリーナは両腕を伸ばし喜びを表した。シリアは苦笑いを浮かべると後ろのソファアに座り、まだ眠たそうに朝食を食べている少年を見た。

「ディオ。レイドは？」

「レイドさんならまだ寝てるんじゃないかな。…起こそうか？」

「お願い」

シリアは笑みを浮かべると、ディオも笑みを浮かべナイフを手に持って階段を降りて行った。

穏やかな眠りを楽しんでたレイド。だが、ただならぬ胸騒ぎを感じ一気に飛び起きた。さっきまで寝ていた頭場所には深々とナイフが刺さっている。

「おはよ。レイドさん！」

ディオは扉の前でにこやかに声をかけた。

「ああ……。おはよう、ディオ。ナイフが突き刺さってるのは気のせいか……？」

レイドはナイフを呆然と見つめている。そのナイフをディオが抜いた。

「気のせいじゃないよ」

ディオがレイドを起こす時はいつもこうだ。だが今日は少し違ったらしい。

「確実に人間の急所を貫いているんだけど……、これは夢かな？」

「夢じゃないよ。だって、たまにはこうしないとレイドさん、起きないでしょ？」

「……………」

……ハア。

なんの悪気もない様子のディオに、レイドはため息しか出なかった。

レイドはそのままディオに引つ張られ、コントロールルームへ入って行った。

「起こしてきましたよ！」

そう言っただディオは再びソファアに座り、レイドはシリアに近付いていった。

「おはよう、レイド」

「おはよう、シリア。それより、ディオに起こさせるのやめてくれないかな。……死ぬよ、俺」

その言葉にシリアはクスツと笑う。

「レイドがもう少し早く起きてくれたらね！」

レイドは苦笑いした後、努力するよ、と言ってディオの隣に座

った。そして辺りを見回す。

「そういえば、グラノーとテイルは？」

グラノーとテイルはこの宇宙船を造る時、設計、製造に協力してくれた者だ。その為、レイリアの構造を熟知しているので管理を中心に任されている。

ちなみにこの二人とイリーナ、マラノアは元はジェルラードで働いていた人物だ。

「二人共、動力部の冷却装置が調子悪いから修理に行ってるわ。それと、今からジェルラードに一旦帰ろう、って話をしてただけだよ……」

「いいんじゃないか。一年近く帰ってないからな」

「決まりね」

レイドの言葉で完全に進路を変えたレイリアに通信が入った。

「あら、いいタイミングね！」

その通信はジェルラードからだった。通信を受けると、モニターにはジーマとグラゼンの姿が映し出された。

「お久し振りじゃのう」

ジーマは本当に懐かしく思っている様子で声を出した。

「ええ、お久し振りね。元気そうで何よりだわ！」

「それはこっちも同じだ。仲良くやってるか？」

グラゼンも笑みを浮かべる。

「それなりにね。ハーリーとダミアはいないの？」

「あの二人はヴァイラへ旅行に行きおった」

「そっちも暇そうね。それより、何かあったの？こっちは丁度良くジェルラードへ戻るところなんだけど……」

シリアがそう言うと二人の表情が少し険しくなったように見えた。

「それは良かった。実は今日の朝方、テトランスの森に小型船が一機墜落した」

「小型船？一体どんな？」

シリアの表情も曇る。

「一人乗りの脱出船じゃ。中に乗っていたのは少女じゃった。その少女を君達にとある惑星まで送り届けて欲しいんじゃよ！詳しい話はジェルロードでしょうと思っくんじゃが…」

「…分かったわ。とりあえずあと数時間で戻れるから！」

「すまんのう。ジェルロードで待つとるぞ」

通信を切ると、シリアは大きく息を一つ吐き出した。

「イリーナ、美味しい物を食べるのは無理みたいよ」

「まあしょうがないわねえ。今度にするわ！」

そう言うイリーナだが顔にはシヨックの色が隠せないでいた。

シリアは苦笑いを浮かべ、レイドに顔を向ける。そのシリアの言いたい事がわかったのか、レイドは首を傾げ、今はまだ何とも言えない、と言ったかのようにお手上げのポーズをした。実際に詳しく聞かなければ分からないことだったので、シリアも深くは考えなかった。

これによって、予想もしない出来事が二人を襲うことになるとは、この時は知る由も無かった。

始動

誰もいない休憩室で一人椅子に座り俯いていたシャルスールは色々と考え事をしていた。

私を乗せてくれたスラナラージの部隊の人は大丈夫だったのかな？私がいなくなって心配してないかな？

そこでシャルスールは苦笑いを浮かべた。

私を心配してくれる人なんて、一人もいないじゃない。…何故私が襲われるの？平穩に生きたいよ…。お父さん、お母さん。

シャルスールの瞳から涙が零れ落ちた。

「考え事？」

突如聞こえてきた声に驚き顔をあげた。そこにはステイブが立っていた。シャルスールは慌てて涙を拭う。

「ステイブさん！…まあ、そんなところです」

「君を送ってくれる人達が到着したよ。四聖官の所に行こう」

シャルスールは顔を伏せた。

「…はい」

小さくそう言うってからステイブを見上げる。

「ステイブさん。本当にいいんでしょうか？本当に私をエマスグラスへ送ってくれるんでしょうか？私のせいで危険な目に遭うかも shouldn't なんですよ！」

シャルスールの目は真っ直ぐステイブを捉えていた。

「シャルスールちゃん、僕はきつと協力してくれると思う。彼等はこの惑星を救ってくれた人達なんだ。きつと君も救ってもらえる！」
真剣にそう言ったステイブだが、少し照れた後、

「まあ僕が行くわけでもないんだけどね」と、付け加えた。

その後、まだ不安そうなシャルスールを連れ、聖官と話し合った部屋へと移動した。

そこには既に、レイド、シリア、ディオの姿があり、聖官も久々

の再会を喜んでいた。ステイブも久々の再会に心を躍らせた。

「お、ステイブ。噂は聞いたぞ。随分成長したみたいだな！」

レイドが懐かしい笑顔を向けてくる。懐かしい、と言ってもほんの一年前帰って来た時にも会ったのだが、ステイブはそう感じた。「まだまだ、これからですよ！」

「それよりステイブ。この子ね。例の少女は」

シリアはシャルスールに視線を下ろした。

「相変わらずシリアさんはさばさばしてますね。そうです。この子をエマスグラスという惑星へ送ってほしいんです」

「名前は？」

ステイブの最初の言葉を敢えて流し、シャルスール自身に言葉をかけた。

「シャルスール。シャルスール・ミールメイラです」

シャルスールは緊張した面持ちで答えた。ステイブとの会話の中で、少なからず二人の特別的なオーラを感じていたのだ。

「じゃあシャルでいいな！これから少しばかり一緒になるんだから」

レイドの言葉にシャルスールとステイブの表情が明るくなった。

「それじゃあレイドさん！送ってくれるんですか！？」

「あ？そういう話だったんだろ？」

首を傾げるレイドにジーマが口を開いた。

「実はだな……」

全員が椅子に座り、ジーマ、グラゼン、ステイブが中心になり、今までの経緯を話した。真剣に聞いていたレイド達だが、その中で一つ気になるものがあつた。

「宇宙海賊…？もしかして、ルーランデ？」

「確かそう言ってたな…」

グラゼンがシャルスールの方を見ると、驚いた様子で頷いた。

「ルーランデを知っているんですか？」

シャルスールが尋ねる。

「一度マラドールという惑星で逢ったことがあるわ。その時、色々

話もしたんだけど、ルーランデが意味もなく襲ったりすると思う？」
シリアはレイドに顔を向けた。

「思えないな！宇宙海賊といっても俺達と同じように宇宙を旅しているだけの連中だ。そんな事をする奴らじゃ無いと思う」

「でも、現にスラナラージの宇宙船を襲ったのはルーランデでした」
シャルスールの言葉で少しの静寂が流れる。

「まあその事は後で考えましょう。それで？あなたは何故狙われているの？」

「……………わかりません。」

そう言っつて俯き、ペンダントを握り締めた。

「そのペンダントは？」

シリアはシャルスールの首に掛けられ、今握り締めたペンダントに目を付けた。

そのペンダントにはとても綺麗とは言えない黒い石が付いている。それを大事そうにしているシャルスールが不思議だったのだ。

「これは、両親から貰った唯一の形見なんです」

「ということは、あなたの両親は……………」

「……………はい。一年前に、何者かに殺されました。私がお家に帰ると、全てが壊されていたんです。それからです。私が謎の連中に狙われ始めたのは」

「そうだったの……………」

シリアにはシャルスールの気持ちが痛いほど分かった。シリアも父親をあんな形で失っている。その時、レイドがいたから立ち直れたのだ。だが、今のシャルスールには頼れる人が近くにいない。何としても助けてあげたい。シリアはそう思っていた。

「……………しても……………」

「え？」

シャルスールが何か口に出したがシリアには聞き取る事が出来なかった。

「そんな私でも……………皆さんはいいんですか！？危険な目に遭うかも……………」

しれないんですよ!」

シャルスールは涙ながらに言った。

シリアはそれに笑顔で返す。

「私達なら大丈夫よ。あなたは何も心配しなくていいわ」

「まあ俺達も暇人だからな。逆に嬉しいくらいだよ!楽しく行こうぜ、シャル!」

レイドもにやっと微笑んだ。

「あ、ありがとうございます!」

シャルの笑顔を見たレイドはよし!と言って立ち上がった。

「ディオ、シャルをレイリアの場所まで案内してやれ」

「了解。行こう、シャル」

ディオはシャルを促し、部屋を出て行った。

「…どう思う?」

シャルが出ていったのを確認した後、シリアがレイドに尋ねる。

「シャルスールを襲う謎の連中、そしてルーランデ海賊の行動。襲われる理由も分からない。この先、何もなければいいが……」

レイドは少し間をあけた後、

「良い予感はない」

と険しい顔で言った。シリアもそれに頷いた。

「私達であの子を助けてあげられればいいんだけどね」

その後、ジーマとグラゼンに別れを告げ二人は部屋を出て行った。

「これがレイリアだよ」

ディオ、シャル、スティーブはレイリアの前で足を止めた。シャルはそれをまじまじと見つめる。

「すごい…。でも、思ったより小さいんですね」

「機動力重視で造られたからね。高速空間移動も出来るし攻撃性も高い。最高の戦艦だよ!」

ディオが誇らしげにそう言った後、レイリアの中から四人の男女が出て来た。

「あら、ステイブ！久しぶりね」

マラノアが笑顔で言った。

「お久しぶりですね、皆さん。どうですか？宇宙の旅は？」

「なかなか楽しいぜ！マラドールと言う惑星も見つけたしな」

レイリアの一員、グラノーが言った。

半年前、レイリアは一つの惑星を見つけた。そこは五大惑星で言うところとテトランスのような人の多い惑星で、技術レベルも大差ない。ルーランドと出会ったのもこのマラドールだ。

「それで、例の少女はこの子っすか？」

レイリアの一員、ティルが口を挟む。

ステイブはそうです、と言って簡単に経緯を話した。その後、簡単に自己紹介を済ませた。

イリーナはシャルのことが気に入った様子で、さつきからずっと頭を撫でている。

「本当に可愛い子ね。こんな子を娘にしたいわ！」

「イリーナじゃ無理だな！料理も出来ないし、部屋もあの状況だしな……」

グラノーはイリーナの部屋の様子を思い浮かべた。イリーナの部屋は服やら雑貨やらで足の踏み所も無い状態だ。おまけに不味く作ることのほうが難しい簡単な料理でさえ作れない。

それは全員が承知していることで、グラノーの言葉で静かに頷く。イリーナも必死に言い訳を考えるが無駄であった。

その様子を見ていたシャルは小さく笑った。

「皆さん、仲良いんですね」

シャルにはここ最近、こんな和んだ気持ちになることは無かった為、グラノー達の普段の会話でさえとても新鮮に感じていた。

「自己紹介は終わったみたいだな」

「すぐに出発するから準備をして」

少し遅れてやって来たレイドとシリアの声で早々と行動に移るグラノー達。二人もレイリアの中に入るうとするが、ステープが止めた。

「あの子、休憩室で独り泣いていたんです。お願いします！あの子を助けてあげて下さい！」

頭を下げるステープに、二人は顔を見合わせ笑みを浮かべる。

「分かってるわ。私達もそのつもりよ」

それだけ言うと二人はステープに背を向けた。ステープはシヤルの平穏を祈りながら離れていくレイリアを見送った。

始動（後書き）

申し訳ありませんが、行き詰まりと多忙な為に暫く更新出来ません。
ご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559c/>

COSMIC STAR ~ SECOND WORLD

2010年10月10日01時55分発行